

十七音に^{したた}認める思い出とふるさとの風景 「内子町小・中学生俳句大会」

「第9回内子町小・中学生俳句大会」(内子町教育委員会主催)の表彰式が12月15日、共生館で行われました。町内全ての小・中学校から957句の応募があり、最優秀賞8句、優秀賞46句、入選25句が選ばれました。式では受賞者に賞状が贈られた他、選句者を務めた町内俳句会の代表者や教員、夏井いつきさんの講評が述べられました。ここでは最優秀賞に輝いた作品と、選句者の講評を紹介します。



炎天下
土にまみれた
ユニフォーム
小田中2年 亀岡湊人さん



妹の
地団駄横目に
かき氷
内子小5年 植田健太さん



あげ花火
妹弟の口
開いたまま
太瀬小4年 小林茉莉愛さん



ミニトマト
すきじゃないけど
水をやる
内子小2年 土井涼巴さん

内子町教育委員会選

「土にまみれたユニフォーム」に努力の跡がうかがえます。炎天下で土まみれのユニフォームをじっと見つめる作者。今は辛い苦しいと思っているかもしれませんが、この経験があって、辛抱強い、たくましい人間に成長できるのです。私には「土にまみれたユニフォーム」が頼もしくさえ見えました。

お祭りの情景でしょうか。妹はくじにでもはずれたのか、それとも他に悔しいことがあったのか。そんな妹の横で涼しい顔をしてかき氷を食べる作者の様子が浮かびます。怒っている声とシャリシャリとかき氷を食べる音が聞こえてくるようです。そんなちょっとした出来事を切り取って俳句にしたところがよかったです。

夏の風物詩である打ち上げ花火。ふと妹と弟を見ると、2人とも大きく口を開けたまま花火を見上げています。口元に焦点が絞られているところがいいです。きれいな花火に感動する様子が想像でき、妹や弟を気遣う優しさも感じます。きょうだいの様子を見て、より花火の素晴らしさを感じたのではないのでしょうか。

庭に植えてあるミニトマトでしょうか。あまり好きじゃないけれど毎日水やりしています。植えた苗がだんだん大きくなって、小さな実がつくのがうれしいから。育てる楽しみに目覚めたんですね。ミニトマトが苦手な気持ちと植物の成長を願う気持ちが伝わります。今は好きでないとトマトも、やがて大好きになることでしょう。

《選句者の講評》



古神社
雨のにおいと
花火かな
小田中3年 源田一花さん



はむ汗
トルコマーチの
装飾符
大瀬小6年 坂本音羽さん



岩の下
ぼくの手かんだ
川の主
五十崎小4年 東照 陸さん



どらごんが
にゅうどうぐもに
かみついた
天神小1年 山上幸杜さん

夏井いつき選

由緒ある古い神社を包み込んで降る雨。年月を経た社殿の木の香や、境内にそびえる大木を濡らす雨の匂いに包まれながら、雨の上がるのを待っていたのでしょうか。さあ、花火大会が始まりました。雨上がりの夜空にくっきり鮮やかに打ち上がる花火。華やかに目まぐるしく移り変わる花火に圧倒されながら、雨の香にたたずんでいます。

ベートーヴェンやモーツァルト作曲の『トルコ行進曲』の楽譜にある、賑やかな装飾音符を思いました。行進の歩調を合わせるために作られたマーチ。規則正しいリズムを飾る音符を、素早くきらびやかにピアノで弾いてゆく作者。指の激しい動きにつれてびっしょりとかく汗。小さな装飾音符の記号と、弾む汗がよく似合っています。

夏休みに涼しく川遊びをする風景が目には浮かびました。川の水はきりりと冷たく、アユやイワナなどの川魚たちが、すい、すい、と楽しげに泳いでいることでしょう。岩の下に見えない所に手を差し入れるのはちょっぴり怖かったかもしれませんが。手をかぶって濡られ、はっとした全身の戦々。かんだのはきっと「川の主」に違いありません。

「どらごんみたいな入道雲」という句とはちょっと違います。雲のどらごんが、その横の入道雲に噛みついているように見えたのでしょうか。それとも入道雲の前でおもちゃの「どらごん」を持った手を空に向けて、入道雲にかみつく空想を楽しんでいるのかもしれませんが。かみつかれても入道雲はもくもくと元気いっぱいです。

《夏井先生の講評》